

第3回

シリーズ「霊的集団の誤りを正す」第3弾

ともひさ 太田朝久

駒場集団の言説の誤り

本講座では、霊的集団「李勝哲・駒場久美子集団」の言説の誤りを取り上げます。彼らは、16万訪韓セミナーのみ言などを自分かかってに解釈し、自分たちの活動を正当化しようとしています。彼らの「誤った言説」を文鮮明先生のみ言を中心に正しながら、私たちが持つべき正統的な信仰とは何かについて説明します。KMS会員とAPT F会員は動画版シリーズ「霊的集団の誤りを正す」第3弾を、KMSウェブサイトで見聴できます。第1弾、第2弾も併せてご覧ください。(編集部)



の性稟(せいりん)を結実(けつじつ)すべき……立場(たてまち)にありましたが、(霊肉(れいにく)) 相対的基準(たいたいきじゆん)に立てなかったことよって、実体化(じつたいか)することなく、神様がそれを再び神様(かみさま)のもとに収めたのです。そうして、それをイエス時代に主体(しゅたい)の前に対象(たいしょう)として送ったのです。それで、それ(聖霊(せいれい)) には体(たい)がないのです。イエス様には体(たい)がありますが、聖霊(せいれい)には体(たい)がないのです」(『地上生活(じやうじやうせいか)と霊界(れいがい)』二八七ページ)

を復帰(ふくけい)しなければなりません。もし、イエス様が十字架(じゆうじや)で亡(な)くならず、生きて結婚(けっこん)をし、「真の母(まのぼ)」を迎えたいなら、「聖霊降臨(せいれいこうりん) 自体(じたい)がありえなかったというのです。聖霊(せいれい)とは、イエス様が霊的(れいてき)に復活(ふくわつ)された後(のち)になって、霊的(れいてき)な「真の母(まのぼ)」として役事(やくじ)しておられる存在(そんざい)であるという点を、明確(めいせつ)にしておかなければなりません。

にしなければ、アダムの完成圏(ぶせつきん)が復帰(ふくけい)できないのです」(『真の父母(まのふぼ)の絶対価値(ぜったいかけ)と氏族(しゆぞく)的メシヤの道(みち)』三八ページ)

したがって、現代の摂理(せいり)においては、真の父(まのちち)であられる文鮮明先生(ぶんせんめいせんせい)の相対者(たいたいしや)として立たれ、本来(ほんらい)の聖霊(せいれい)の役割(やくわい)を担(お)っていらっしゃるおかたが、真のお母様(まのおぼさま) (韓鶴子夫人(かんかくしふじん)) です。【図1】この聖霊(せいれい)の实体(じたい)とも言いえる「真の母(まのぼ)」とは、どこまでも、この地上世界(じやうじやうせかい)から探し出して復帰(ふくけい)してこなければならぬといつことを知らなければなりません。文鮮明先生(ぶんせんめいせんせい)は、次のように語(かた)っておられます。

「真の母(まのぼ)がサタン(さたん)に奪(さら)われたので、本来(ほんらい)の人間(にんげん) (メシヤ) は、死(し)を覚悟(かくご)してまでも、サタン(さたん)世界(せかい)から奪(さら)い返(かえ)してこなければなりません」(『祝福家庭(しゆくかてい)と理想天国(りやうてんこく) (一)』五六一ページ)

四、「聖霊を送るための基台」を主張している誤り

駒場集団(こまばくしゆん)は、「メシヤのための基台(きだい)」以外(い)に、「聖霊(せいれい)を送るための基台(きだい)」というものがあると主張(しゆん)します。

駒場集団(こまばくしゆん)は、彼ら(かれら)が独自(どこじ)に出版(しゅつぱん)した『天地人真(てんちじんま)の父母(ふぼ)実体(じたい)み言(みご)』に対して『という小冊子(せうさくし)で、次のように述(た)べています。

「メシヤを迎えるための基台(きだい)を立てるようになれば、聖霊(せいれい)を送るための基台(きだい)は造成(せいぞう)されるのです。メシヤを迎えるための基台(きだい)は、父母(ふぼ)を復帰(ふくけい)するための基台(きだい)だからです。……実体(じたい)基台(きだい)を立ててメシヤと一つになれば、聖霊(せいれい)を送るための基台(きだい)が形成(けいせい)されたことになるので、すぐ聖霊(せいれい)の役事(やくじ)が始まること(こと)ができるようになります」(駒場資料(こまばくしりょう)、一一八〜一二九ページ)

しかし、この「聖霊(せいれい)を送るための基台(きだい)」という概念(がいねん)は、完全(かんぜん)な誤り(ご)であり、駒場集団(こまばくしゆん)がかかってにつくりあげた「偽りの言説(いつはりごんせつ)」

にすぎません。

彼ら(かれら)は、天(あま)からメシヤ(みしや)が遣(ま)わされるように、聖霊(せいれい)も天(あま)から送(おく)られてくるものであるかのように主張(しゆん)します。確かに、二千年前(にせんねんぜん)のイエス様(イエスさま)のときには、ペンテコステの日(ひ)に、天(あま)から聖霊(せいれい)が降(くだ)りてくる、いわゆる「聖霊降臨(せいれいこうりん)」がありました。

しかし、この聖霊(せいれい)とは、いかなる存在(そんざい)であるのかという点を、まず明確(めいせつ)にしておかなければなりません。文鮮明先生(ぶんせんめいせんせい)は、次のように語(かた)っておられます。

「イエス様(イエスさま)は、人類(にんげい)の父(ちち)として来(き)られ、聖霊(せいれい)は、人類(にんげい)の母(ぼ)としてこの地(ち)に来(き)ました。しかし、彼ら(かれら)は、霊肉(れいにく)を中心(ちゆうしん)とした父母(ふぼ)になることができずに霊的(れいてき)な父母(ふぼ)としてのみ役事(やくじ)してきました」(『真の孝(まこと)の生活(せいか)』七六ページ)

また、次のようなみ言(みご)があります。

「イエス様(イエスさま)と聖霊(せいれい)が果た(果た)すべき使命(しめい)は、(本来(ほんらい)なり) 息子(いっしん)、娘(むすめ)を出産(しゅつさん)することです。……エバ(えば)は霊(れい)と体(たい)を身(み)にま(ま)とって本然(ほんぜん)の母(ぼ)

ちなみに、真のお父様（文鮮明先生）が、聖霊の実体とも言いえる真のお母様（韓鶴子夫人）を復帰し、聖婚式を挙げられるために立てられた「基台」とは、どこまでも三人の信仰の子女であったという点を、明確にしておかなければなりません。文鮮明先生は、次のように語っておられます。

「霊の子とはいったい何か。これは失われた三人の天使長を意味する。アダム、エバが、三人の天使長の共同圏、協助圏に立てなかつたから人間は墮落した。それを蕩滅しなければならぬ。……だから、三人の霊の子女がいなければ祝福できないということとは、理論的であり、原則的である。……天使長圏をもとがえずには、（彼ら三人が）霊の親であるアダム、エバを愛するとともに、おなかにはらむ子供を愛した基準を通して、その子供が生まれ、さらに、その子供たちが結婚する日まで責任をもたなければならぬ。……これを先生の家庭で見れば、先生の子供を、先生が干渉して

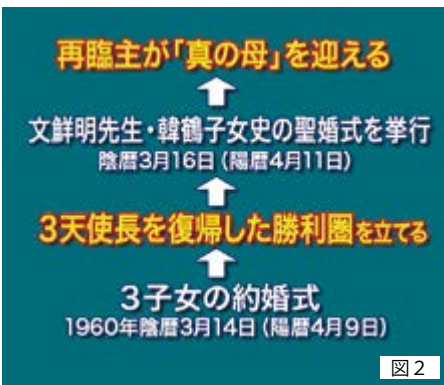


図2

ですから、真のお父様は「聖婚式」をされる前に、三子女（三家庭）の約婚式を一九六〇年天曆三月十四日（陽曆四月九日）にされ、三天使長を復帰した勝利圏を立てた上で、天曆三月十六日（陽曆四月十一日）に聖婚式を挙行しておられるのです。【図2】このように、三天使長にあたる三人の信仰の子女という勝利圏を立てられ、再臨主は、「真の母」を迎えていかれたことを、

私たちは知っておく必要があります。

五. 聖霊のみ言は「母の国から現れる」と主張している誤り

駒場集団は、聖霊のみ言は「母の国」から現れると主張します。

「み言摂理のためには聖霊のみ言が必要になるので、その基台を造成するために、母の国家が必要だということです。……お父様と一つになった時、その（母の国）日本で歴史的な聖霊のみ言が現れるようになるのです」（駒場資料、二一九〜二三〇ページ）

駒場集団は、日本から「聖霊のみ言」が出てくると強調します。しかし、ここで考えなければならぬことは、果たして「聖霊」とか、「真の母」という存在は、エバ国家、母の国から現れてくるのかという点についてです。

実際、二千年前に、イエス様の相対として「聖霊」が降臨しましたが、それは、エバの主人、『世界経典』、以上の八種類の書籍です。この教本は、皆様が霊界に入っても読め、学ばなければならぬ本です（『トウデイズ・ワールドジャパン』二〇一〇年九月号、一一一ページ）

このみ言にあるように、八大教材教本とは、真のお父様が人類に対する「遺言」として残してください永遠なみ言であると語っておられます。しかも、これらのみ言は霊界に行っても学ばなければならぬみ言であると語っておられるのであって、駒場集団が言うように、「今がみ言の摂理にあたるということを知らせてくださるために」という、ある一時代的なものではありません。

また、彼らが言うように、真のお父様が語られたみ言と「原理」以外に、何かを悟り、見つけなければならぬ他のみ言があるというのでもありません。

以上のように見ていくと、駒場集団の言説は、み言に何の根拠も持たない間違いだらけの言説であることが分かります。

ルサレム、すなわちイスラエルにいる弟子たちに降臨したのであって、エバ国家、母の国という別の国家に降りてきたわけではありません。

現代で話をする内容と、二千年前との内容を比較対照して考えてみると、彼らの言説は、成り立たない、架空の言説であると言わざるをえません。

また、原罪清算、血統転換という人間の「重生」は、あくまでも、真の父母様、すなわち文鮮明先生と韓鶴子夫人の主礼による「祝福結婚」によってなされるのであって、摂理的な父母国家、すなわち韓国、あるいは日本という国家によってなされるのではないという点を明確にしておく必要があります。

六. 「八大教材教本」を下させた意味を、誤解している

駒場集団は、真のお父様が「八大教材教本」を下させた意味を誤解して捉えます。彼らは、次のように語っています。

「ユダヤ民族が……（モーセに対し）不信して不平不満が大きかったので、結局、み言の摂理である幕屋の摂理が必要になつた……（同様に）今がみ言の摂理にあたるということを知らせてくださるために、お父様は八大教材教本をくださったのです」（駒場資料、一三二ページ）

彼らは、こう述べることで、自分たちが主張する「聖霊のみ言」に摂理的な根拠を与えて自己正当化しようとしています。これも誤った主張であり、真のお父様のみ言に根拠のない、彼らがかつてにつくりあげた言説にすぎません。

文鮮明先生は、「天地人真の父母定着実体み言宣布大会」の講演文で、次のように語っておられます。

「皆様、真の父母様は、すでに人類のためへの遺言を準備し……永遠なる人類の教材、教本として八種類の本を残しました。……『文鮮明先生マルスム選集』、『原理講論』、『天聖經』、『家庭盟誓』、『平和神経』、『天国を開く門真の家庭』、『平和の主人、血